

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：34419

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26590242

研究課題名(和文) オーストラリアの歴史教育におけるキーコンピテンシー育成の理論と実践

研究課題名(英文) Theory and practice of developing historical literacy and competency: A case study of history education in Australia

研究代表者

下村 隆之 (SHIMOMURA, Takayuki)

近畿大学・教職教育部・講師

研究者番号：50633781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、オーストラリアの歴史教育が求める歴史的学力について、現地の専門家訪問調査、学校訪問調査、歴史カリキュラムおよびシラバスを分析することによって、検証した。オーストラリアでは、歴史を知識の積み重ねとする知識偏重型ではなく、疑問探究型の歴史教育が主流であり、いわゆるコンピテンシーベースである、近年はそのコンピテンシーベースの中でも歴史的思考力の獲得に注力していることが確認できた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on understanding and learning from the methods used in teaching Australian History Education. The reason why The researcher(I) am interested in Australian History Education system is that it is an inquiry and research based methods. My research questions are below; 1. How to conduct inquiry/research-based education in classroom, 2. Benefits of inquiry/research based history education, 3. Difficulties in conducting inquiry/research based education, 4. Influence of the National Curriculum introduced.

The research found that the new history curriculum and syllabus introduced historical thinking concepts to enhance students' competency skills. This systematically reinforces inquiry-based investigations.

研究分野：教育社会学

キーワード：オーストラリア 歴史教育 コンピテンシー 歴史的思考力

## 1. 研究開始当初の背景

歴史学習をともしれば過去の事象の知識詰め込み型に捉えてきた日本の歴史教育の中で(日本学術会議, 2011)、4万年以上前から居住する先住民と移民からなる多民族で構成された国家において展開されるオーストラリアの歴史教育は、多角的視野に富み、学習者である子どもが主体となった豊富な実践教育を奨励している。

しかしながら、日本におけるオーストラリアの教育研究に関しては、教育政策や言語教育、多文化教育や先住民研究など幅広いが、社会科・地理歴史および公民科に関する教科教育領域の研究に関しては、地理分野で永田(2010a; 2010b; 2012)が公民分野で下村(2006)が全国規模の学会誌で成果を公表するに留まっており、歴史教育分野においては未だ十分な研究成果が明らかにされていない背景がある。

他方、国際学力調査(PISA)の総合読解力調査でも、オーストラリアは常に上位国内に位置するなど同国の教育は国際的にも高く評価されている(文部科学省, 2015)。このような、他の上位国の教育のシステムや実践を明らかにしていくことには、高い意義がある。

まず本研究の第一の背景は、未開拓の分野への挑戦という観点で見いだされる。よって、挑戦的萌芽研究分野にて応募・採択され研究に至っている背景がある。

## 2. 研究の目的

近年、グローバルな人の移動の中で、日本の多文化社会化は進んでおり、異なる民族や文化との接触は増すばかりである。そのような中で成熟した国際交流を図るには自国の歴史を国際社会との関連中で包括的に捉えることや、国際社会から見た日本と世界に関する歴史観など多角的な歴史認識を育むことが求められる。上述された日本学術会議の提言にもあるような、単なる知識詰め込み型の教育からの転換が必要不可欠である。そのため他国研究が、本研究の目的の基盤である。

オーストラリアは、先住民と世界中からの移民で構成された多文化社会であり、また犯罪率の低さや米国や英国のように国内でテロが発生していないことから、成熟した多文化主義社会を構築している。また、異なった多くの移民の活躍により現在の国家が成り立っている点からも、歴史教育における歴史の定義を「人類の経験の学問」とし、歴史の性質を「異なる視点や見解を反映したもの」(Board of Studies NSW, 2003)といった立場に立ち、歴史の解釈には多様性があることを前提にしていることである。

このような視点から取り込まれる歴史教育の実践を収集・検証し、日本の社会科およ

び地理歴史教育に新たな提案をすることは、豊かな歴史観を持ち広く国際社会で活躍できる人材を育成することのみならず、内なる国際化にも貢献し、歴史教育を充実・発展できるといった視点と目的から本研究課題の着想に至った。

よって本研究は、未開拓の領域にチャレンジする斬新なアイデアと収集されるデータを単に外国研究としての成果の紹介に留まるのではなく、教育現場での新しい歴史教育の理論と実践化に導くことで新たな成果が期待できることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が単独で行う研究である。初年度はナショナル・カリキュラムと州のカリキュラム(シラバス)ないしは歴史教科書の分析とカリキュラム作成に関連する教育行政機関やそれらにかかわった大学等の研究機関の専門家への聞き取り調査を実施し、7校の学校訪問による実践調査実施した。

次年度以降は、それらを精査し、新たに確認できた疑問点や不足となった情報の収集に再度同じ教育機関や研究機関を訪問することや新たな訪問先を開拓しデータの収集に努めた。

特に、日本サイドから何を求められているか、あるいは何を明らかにすることが必要か広範かつ正確に確認するため、3つの異なる学会で報告し、それらの発表の質疑応答などで確認できた疑問点を整理し、再調査に望み、研究の偏りを防ぐ方法に配慮した。

同様にそれは、現在審査中の論文にも該当し、研究の妥当性や正確性あるいは幅広く公表していく意義からも、教科教育研究の領域以外にも、例えばオーストラリア研究分野の専門であるオーストラリア学会に投稿を試みるなど、単に1分野の研究領域に留まらないよう配慮することも、本研究の持つ重要な方法の一つである。

## 4. 研究成果

研究成果としてはまず、オーストラリアは戦後しばらくまで続けられた、講義による知識注入型の歴史教育から、疑問探究型の生徒主体の歴史教育を継続しているが(Marsh 2011)、近年オーストラリアで国家として初のナショナル・カリキュラムが策定されたことにより、歴史的学力の中核であるコンピテンシーがさらに高度化され構築化されたことである。

具体的には歴史的理解力として、歴史理解を高めるため疑問的探究を基盤として上で、6つの歴史的思考力コンセプト(証拠(evidence) 継続性と変化(continuity and change) 原因と結果(cause and effect) 視点(perspectives) 共感(empathy)

重要性と議論の可能性 (significance and contestability)) が科目の支柱として設定されたことから確認できる。(ACARA 2016)。

コンテンツにも変化が見られ、オーストラリア史をグローバルヒストリーの関連の中で学習することが強調され、その中でもアジア・パシフィック地域の一員として、アジア地域への理解を深めるアジア・レテイトの獲得が求められている。

これは、例えば高等学校に相当する歴史科目の中でも『現代史』では、取り扱う内容にイランやアジアの諸地域が新たに取り入れられたことから確認できる (NSW Education Standards Authority (NESA). 2017)。

本研究は挑戦的萌芽研究であり、未開拓の分野に挑戦している。したがって、研究成果の分析・精査には時間を要する。したがって、具体的な研究成果が公表されていくのは、現在審査中の論文を含めこれから数年かけて広めていくことになる。

それ故に、学校現場でより直接的にかかわる、更なる細部の研究成果について、例えば、具体的な歴史授業の方法として、「日本軍のダーウィン空爆」といった歴史事象を、生徒が6つの歴史的思考コンセプトの視点に立って、如何に証拠を吟味し、原因と結果を分析し、一方的な視点ではなく多様な視点で検討し、歴史的な思考に基づいた議論を展開し結論を導き、それを評価するかについての実践分析の報告に関しては、今年度以降の学会発表や論文で公表する。

#### <引用文献>

ACARA . 2016. *Australian Curriculum: F-10 Curriculum History*. Canberra.

Board of Studies NSW. 2003. *History Years 7-10 Syllabus*. Sydney.

NSW Education Standards Authority (NESA). 2017. *Modern History Stage 6 Syllabus*. Sydney.

Marsh, C . 2011. *Teaching the Social Sciences and Humanities in an Australian Curriculum*. Pearson Australia.

日本学術会議. 2011. 『提言新しい高校地理・歴史教育の創造 - グローバル化に対応した時空間認識の育成 - 』. 東京.

永田成文. 2010a. 「ESD の視点を導入した地理教育の授業構成 - オーストラリア NSW 州中等地理を事例として - 」 『社会科教育研究』 No.109

永田成文. 2010b. 「市民性を育成する地理学習の授業構成 - オーストラリア NSW 州中等地理 『人口問題』単元の分析を通して - 」 『社

会系教科教育学研究』第22号

永田成文. 2012. 「系統地理を基盤とした市民性を育成する地理教育の授業構成 - オーストラリア VIC 州中等地理を事例として - 」 『社会科研究』第75号(2011.11)

下村隆之. 2006. 「オーストラリアの公民科領域科目「アボリジナル研究」 その成果と課題」 『公民教育研究』vol.14

文部科学省. 2015. 『OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) の調査結果』

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

2件 審査中

〔学会発表〕(計 3 件)

下村隆之「オーストラリアの歴史教育におけるコンピテンシーの変化 ニュー・サウス・ウェールズ州の「現代史」新旧シラバスを比較して 」 『社会系教科教育学会第29回研究発表大会』社会系教科教育学会. 2018.

下村隆之「オーストラリアのナショナル・カリキュラムにける歴史的思考力」 『日本教科教育学会第43回全国大会』日本教科教育学会. 2017.

下村隆之「オーストラリアの歴史カリキュラムにおけるキーコンセプト セイシャス&モートンのビッグ6との比較分析」 『全国社会科教育学会第66回全国研究大会』全国社会科教育学会. 2017.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下村 隆之 (SHIMOMURA, Takayuki)

近畿大学 教職教育部・講師

研究者番号：50633781

(2) 研究分担者 なし

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )

オーストラリアの教育及び歴史教育専門家  
多数、および以下の学校の歴史担当教諭

1. St Aloysius; College (47 Upper Pitt Street, Milsons Point, NSW 2061)
2. Sydney Grammar School (College Street Darlinghurst NSW 2010)
3. Ascham School (188 New South Head Road Edgecliff NSW 2027)
4. Barker School (91 Pacific Highway Hornsby NSW 2077)
5. International Grammar School (4-8 Kelly Street, Ultimo, NSW, 2007)
6. Abbotsleigh School (1666 Pacific Highway Wahroonga NSW 2076)
7. Chatswood High School (24 Centennial Avenue, Chatswood NSW 2067)